

Title	廣松渉の思想 内在のダイナミズム (Abstract_要旨)
Author(s)	渡辺, 恭彦
Citation	Kyoto University (京都大学)
Issue Date	2015-03-23
URL	https://doi.org/10.14989/doctor.k19061
Right	
Type	Thesis or Dissertation
Textversion	ETD

(続紙 1)

京都大学	博士 (人間・環境学)	氏名	渡辺 恭彦
論文題目	廣松渉の思想—内在のダイナミズム		
(論文内容の要旨)			
<p>本博士学位申請論文は、ドイツ観念論、現象学、マルクス主義といった広範な哲学・思想領域を涉猟し、独自の哲学体系を構築していったわが国の思想家・廣松渉を、思想史上に正当に位置づけようとする試みである。本論の問題意識は、歴史的・社会的文脈に逃れがたく投げ込まれている人間が、内在のうちにあっけいかにして主体性を発揮し、自らすすんで歴史に介入・刷新できるかという点に向けられており、これを廣松の思想的格闘のうちに取り戻ろうとするところにある。それは論文の副題「内在のダイナミズム」にも明らかなおりである。</p> <p>本論文は、9つの章で構成されており、おおむね年代順に廣松の著書・論文・時事発言を検討しながら、彼の思想の出発点から収斂点までをたどってゆく。</p> <p>第1章では、新左翼運動における廣松渉の思想動向に焦点があてられ、1970年に名古屋大学を退職するまでの彼の思考が、学生運動の実践活動とからめられながら、前衛(自覚的學生)と大衆をいかに結ぶかという解決困難な問題系をめぐって動いていたことが論じられる。</p> <p>第2章では、廣松が、疎外革命論(人間の「本来の」あり方を奪回せんとする社会革命論)を唱える黒田寛一らとの党派的対立のなかで、マルクスの『ドイツ・イデオロギー』の厳密なテキスト・クリティークを通して、物象化論を打ち出すにいたった経緯がたどられる。疎外論のように彼岸に超越的ユートピアを立てるのではなく、あくまで社会に内在する立場から社会を変革しようとする廣松の革命観があぶり出される。</p> <p>第3章は、主として廣松の『資本論の哲学』(1973年)の解説にあてられ、廣松がその物象化論をもとにマルクスの『資本論』をどのように読み解いていたかを示す。廣松が、『資本論』の価値形態論の構造分析的解釈において、商品世界に内在せざるをえない主体がもとより商品世界を超出できないこと、物象化を免れることができるのは生産場面における「観念的扮技による役割行動」によるしかないという見方(「役割理論」)を積極的に打ち出しつつあることが明らかにされる。</p> <p>第4章では、廣松の著書『世界の共同主観的存在構造』(1972年)と論考「役割理論の再構築のために」(1986-88年)が分析され、彼が、G・H・ミードの社会的自我論の援用を通して、個人が環境にゲシュタルト的に巻き込まれつつ自我を形成してゆく存在であること、主観と共同主観を截然と区分することは不可能であることを強調している点を確認される。共同体のなかでの役割存在としての人間のありかたを動かないとするのであれば、そこで人間の主体性と自由がどのように確保されるのかという問題が、アポリアとして廣松に強く迫ってきていることが示される。</p> <p>第5章は、M・フーコー、L・アルチュセールの権力論をも参照しながら、役割行動を通してマイクロ次元での権力から国家権力といったマクロ次元での権力までが作り出されてくるといふ点が検討され、廣松が、我と汝の関係における非対称的な役割理論をもとに国家廃絶への道を構築しようとしていたことが明らかにされる。個々人が下部構造において非対称的に役割を担いつつ物質的な基盤に働きかけて構造変動を起こす実践を通して「新しい社会的生産協同聯関態」を作り出すこと、廣松がそこに、国家権力を主体的に打破してゆく可能性を見ようとしていたことが示される。</p> <p>第6章は、廣松の晩年のポレミックな新聞発表「東北アジアが歴史の主役に」(1994</p>			

年) をかつての京都学派の「近代の超克」論と対照させながら、両者の決定的な社会把握の違いを問題にする。大戦の終局的目標を優先するあまりヨーロッパ的限界としての資本主義社会を把握しそこねたというのが、京都学派に対する廣松の根本的な批判点であり、本章はそこから、彼が打ち出す東北アジア論が、大東亜共栄圏論とは異なる「真の人倫的共同体」なるものを構想しようとしたものであることを論証する。そして、その実現に不可欠なものとして、廣松の「役割-進取」の概念について論じられる。

第7章では、梅棹忠夫の「文明の生態史観」とそれを批判する廣松の『生態史観と唯物史観』（1986年）が扱われる。廣松が、生態学のサクセッション理論を歴史の展開に援用している梅棹の論を批判し、人間が、観念的に構築された「表象的環境」へと投企する存在であることを強調している点、超越的存在者によってではなく歴史・内・存在として人間によって歴史が動かされてゆくことを主張している点が、廣松の歴史観の核として取り出される。

第8章は、「ソ連・東欧崩壊」の事態を受けて廣松が発表したマルクス論（『マルクスの根本意想は何であったか』（1994年）など）を論じ、マルクスのいうプロレタリア独裁、永続革命、世界革命が何を意味するのかについての廣松の根本にある見方を検討する。共産主義社会を実現するには、大上段に理想を掲げての少数者による革命ではなく、ささやかな小集団に働きかけて下部構造である生産関係を再編し、内部から権力を移動させてゆくかたちの社会革命が不可欠だとの廣松の論が、彼の「役割理論」とかわるかたちで論じられる。

最後の第9章は、廣松の最晩年の著作『存在と意味』（第1巻（1982年）、第2巻（1993年））に焦点をあて、彼の認識論を検討する。廣松が、ハイデガーの「道具的存在者」のあり方を批判して、人間は「道具的全体性」のなかで規定されるのではなく、具体的な非対称的役割行為を通して自ら道具を使用することによって価値を生み出す存在であると主張している点が指摘される。そしてそのうえで、彼が、そうした非対称的な役割行為を通して新たな共同体的価値規範を作り上げていくために、その基礎となる規範として共同体における「妥当的正義」が不可欠だとしている点が結論的に強調される。本論は、廣松が「役割理論」の認識論的土台をもとにそうした「妥当的正義」へと向かう思想的方向性を指し示すことによって閉じられている。

(論文審査の結果の要旨)

本博士学位申請論文は、現代のわが国の代表的なマルクス主義思想家と目される廣松渉を、思想史の上に正當に位置づけようとする試みである。廣松については、これまでもさまざまに論及されてはいるが、彼についての一貫したモノグラフはさほど多くはない。廣松の思想を、彼の新左翼運動の時代から、未完に終わった最晩年の著作（『存在と意味』）にいたるまでを克明にたどった本論文は、廣松研究におけるそうした不備を補うものとして貴重なものである。しかし、それだけではない。本論文は、廣松の個別研究の背後に大きなテーマを潜ませている。マルクス主義研究がある意味で沈滞している今日、廣松の思想のなかにそうした滞りを乗り越える契機を見出そうというテーマである。本論文は、そうした意味で、それ自体で独立したアクチュアルな意義をもつ意欲的な論文ということもできる。

本論文の博士論文としての評価すべき点は、およそ以下の4点にまとめることができる。

1) 本論文は、廣松の思想を物象化論から役割理論にいたるまでを、公にされているさまざまな著作、論文、時事発言を厳密にたどりながら、あくまで実証的に追いかけており、その点で、廣松研究がなおざりにされている観のある現在、これを活気づけ、新たに推し進めるうえで貴重な意義をもっている。本論文は、そうした実証主義的な手腕を遺憾なく発揮しながら、1960年代、70年代の政治的熱狂の時代に広く読者層を得た廣松の思想を現代に呼び戻し、その後の彼の思想構築のさまを、その基礎にある認識論にまで踏み込んで明らかにすることによって、彼の思想の全体像を一貫したものとして提示できている。本論文は、そうした意味で廣松を思想史上に正當に位置づけるための前提をもたらしているという点で、重要な意味をもちえている。

(2) 本論文は、廣松の物象化論が、G・ルカーチなどのある種樂觀的ともいえる物象化論とは違って、人間共同体が存続するかぎり逃れられないものとして物象化をとらえており、そこから廣松の役割理論が必然的に展開されてくることを論証した。廣松の物象化論から役割理論への移行の必然性を論証したのは、本論の大きな功績と言えよう。人間の「本来」のあり方を理想として前面に立て、この理想を革命の実現を通して奪回しようとする黒田寛一などの疎外革命論（ルカーチもこの先駆的な流れのなかに入れてよい）に対抗するかたちで、廣松は若いころ、物象化論を打ち出し、人間の超越的なありようではなく、あくまで共同体に内在し物象化にとらわれた（共同体内部での役割を担った）人間という視点から革命をとらえようとした。本論文が、そうした経緯を歴史的かつ具体的にあとづけながら、共同体のなかでの人間の役割に重点を置く廣松の革命論を描き出している点には、大いに評価すべきところがある。

(3) 本論文は、廣松がこうした物象化論にもとづいてマルクスの『ドイツ・イデオロギー』に綿密なテキスト・クリティークを加え、『資本論』（とくにその価値形態論）を検討しなおしている点を、マルクスの現代的な可能性を打ち出したものとして大きくクローズアップしている。それは、言い換えれば、マルクスを構造主義的な観点から読み直すということになるが、とはいえ、そこにはどうしても、革命のためにこの構造主義的な世界の見方自体を突き抜ける契機が必要となる。本論文は、廣松が資本主義のそうした物象化にがんじがらめになった世界を抜け出す契機として、我-汝関係がいわば非対称的になった「観念的扮技による役割行動」の必要性を前面に押し出している点にその突破口を見出す。主体性論から役割理論へのシフトではなく、むしろ逆に役割理論のうちに主体性論を打ち出してゆく作業のうちに、マルクスの革命理論を読み直そうとする廣松の思想的格闘の意義を見出す本論文は、大きな観

点から見て、現代の停滞したマルクス主義の理論的研究と実践に新しい方向性をもたらすものとして評価することができる。

(4) (3)の問題にかかわるが、資本主義社会において超越を打ち出すことができず内在に閉ざされたままの人間がいかにしてその内在性を突破して、自ら主体的に歴史の刷新へと向かうことができるのかという廣松の重要な問題提起に対して、本論文は、その答えの行き着く先を廣松の独特の倫理構築のありように見て取ろうとする。個々人がそれぞれの役割を凝固しない非対称的な関係のうちで担いつつ、生産の場面に「新しい社会的生産聯関態」を漸進的に作り上げてゆくなか、おのずと「妥当的正義」という超越ならぬ超越が開け出す、これが、本論が未完に終わった廣松の最後の著作から読み取ったその終着点である。超越なき世界のうちに、ある種の超越に似たものを倫理的要請として持ち出す廣松理論、本論文が廣松のそうした終着点を示唆することによって、倫理の基盤の喪失のなかで混迷をきわめている現代思想にひとつの可能性の光を投げかけていることも疑いえないところである。そうした意味で本論文が現代思想の分野である種の方向性を提示するものとなりえていること、それもまた、本論文のひとつの大きな魅力であり功績である。

本論文は、いくつかの点（とりわけ廣松の最後の倫理構築の問題）でなお不十分な面を残してはいるものの、以上の諸点から、廣松の思想研究を活性化する点で大きな意義をもつと同時に、現代のマルクス主義研究ならびに現代思想の分野において新たな視点を投げかける可能性をもっており、総体としてすぐれた論文であると判断できる。

よって、本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成27年1月27日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

要旨公表可能日： 平成 年 月 日以降